
くもの巣キャンディー

昼寝日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くもの巣キャンディー

【Nコード】

N4416M

【作者名】

昼寝日和

【あらすじ】

くもが巣をはるように、私はキャンディーを売っての。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売の。

陸は飴売りの女の子の言葉を聞いた。

女の子は路かたに小さな折りたたみ机を置き、その上にくもの巢キャンディー入りの小さな袋を並べている。

くもの巢キャンディーはくもの巢の形をした小さな飴で、机の上に並べられた袋の中に数個ずつ入っていた。

「一つ、ちょうだい」

陸はポケットから代金を出して女の子に渡す。その時女の子が言ったのだ。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売の。

「ふうん」

興味のないように呟くと、陸は小さな袋を受け取り、くもの巢キャンディーを一つ口に入れる。

ふわりと、甘い香りが口いっぱいに広がった。

陸は女の子に笑いかけ、おいしい、なつかしい味がするよ、と語りかける。

飴売りの女の子はうつむきがちにポツンと言った。

とうぶんの間、ここでくもの巢キャンディーを売ることにしたの。気に入ったなら、また、来て。

十

女の子は言葉のとおり翌日も、その翌日も、その翌々日も、同じ場所に同じように小さな袋を並べていた。

陸は毎日一袋ずつ、女の子からくもの巢キャンディーを買う。お世辞ではなく本当においしかったのだ。

女の子はくもの巢キャンディーの入った袋をお客さんに渡す時、

それが初めてのお客さんでも陸のようなお得意さんでも、必ずこう言った。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売の。
ある人は陸のように、ふうんと無関心に相づちを打った。

またある人は不思議そうに、それはどういう意味ですかとたずねた。

またある人は神経質そうに、わけのわからんことを言うなと怒り出した。

飴売りの女の子はそのどれにも答えない。

くもの巢キャンディーを渡してしまったら、あとはうつむいてじっとしている。

おいしいよ、とか、また来るね、などと言えば、女の子はうつむいたままにありがとう、とか、待ってます、などと返した。

陸はいつも買ったくもの巢キャンディーを女の子の隣で食べた。

一個だけ食べて立ち去る時もあったし袋の中にある飴をすべて食べてもまだ女の子の隣に居座ることもあった。

陸はうつむく女の子の隣で、行きかう人々を眺める。

人々の中には時々、足を止めてくもの巢キャンディーを買ったり、ただ冷やかして行ったりする人もいた。けれどほとんどは女の子のことも、折りたたみ机に並ぶくもの巢キャンディーのことに気がつかないようで、迷いなく歩いていく。

飴売りの女の子はくもの巢キャンディーを買ったすべての人に必ず言った。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売の。

十

雨の多い時期になっても、女の子は毎日同じ場所にいた。

大きな傘で雨から商品を守り、女の子の方は、傘は差さずに合羽を着ている。

陸は相変わらず毎日くもの巢キャンディーを買い、飴売りの女の子の隣で飴を食べながら道行く人々を眺めた。

雨降りの日や今にも雨が降ってしまいそうな日は、行きかう人の量がぐっと減り歩調が速くなる。

陸は甘くてなつかしい味のするくもの巢キャンディーを含みながら、飴売りの女の子に話しかけた。

「よくやるね。こう雨が降ってちゃ、そんなに売れないんじゃないの？」

毎日やって来るお客さんがいるから。

ぼそりと、女の子は隣にいる陸にだけ聞こえるような小さな声で言う。

「おいしいからね、これ」

ふいに足早だった歩調がゆるんで、立ち止った。通りがかりの人は、折りたたみ机の上にある最後の袋を手取る。

女の子は代金を受け取って、呟くように言った。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売っての。

+

飴売りの女の子が、くもの巢キャンディーを売っていなかった。いつも飴を売っている所で、大きなリュックを背負い、うつむいて立っている。手にはガラスのビンが握られていた。

陸が近付くと、女の子はゆっくりと顔を上げる。ほおが腫れていた。

「それ、どうしたの？」

お世話になっていた家の人が……。

女の子はそれだけ言うとうつむいた。

「なにがあつたのさ？」

女の子はうつむいたまま何も言わない。陸がもう一度たずねようと口を開きかけた時、聞き洩らしてしまいそうなくらい小さな声が

した。

くもの巢キャンディーを作るくもがいて、その入ったビンを、お世話になっていた家の人が壊してしまった。くもが一匹逃げてしまったので怒ったら、殴られた。

雨は降っていないが、雲が何重にもなつて空を覆っている。

本当は、と女の子はビンを見つめながら一段と小さな声で言った。本当は、このくもたちはみんな不良品として処分されるはずだった。でも、くもの巢キャンディーそれ自体には何の問題もないのに処分してしまうのはおかしいと思った。だからこつそりと、くもの巢キャンディーを作るくもたちを持ち出した。処分予定のくもが消えてしまつて当然のように騒ぎになつてしまつたけれど、見つかつて没収される前に生まれ故郷を出た。その時初めて、私は生まれ育った土地から出たの。以来ずっと、飴売りとしていろんな所を転々としている。

「ここを出て、また違う所に行くんだね？」

陸が確認するように言うと、女の子は小さくため息を吐いた。

くもが巢をはつてその場に落ち着くように、私はキャンディーを売つて一所に落ち着きたかった。なのにここでも、ここ前の土地でも、それ以前のどの場所でも駄目だった。

女の子は陸に、持っていたガラスのビンをつき出す。ビンの中には小さなくもが一匹、ひよこひよこ動いている。

先ほどとは打って変わり女の子はきっぱりと言った。

これ、くもの巢キャンディーを作るくもの。一匹だけあげる。

「いいの？」

驚いた様子の陸に、いつも来てくれたからと小さく笑った。

陸がおずおずとビンを受け取ると女の子は言う。

くもが巢をはるように、私はキャンディーを売ると。

街から飴売りの女の子がいなくなった後も、陸は毎日くもの巢キャンディーを食べ、行きかう人々を眺めた。飴はいつ食べても甘くなつかしい味だった。

様々な人が道を歩く。

たまに陸の目の前で歩みを止め、くもの巢キャンディーはもう売っていないのかとたずねる人がいた。

「飴売りの子は他の街に行ってしまったよ」

そう返して、持っているビンの中を確かめる。くもがビンの中で巢を作っていれば「飴売りじゃないけど、あるからどうぞ」とくもの巢キャンディーを渡すし、巢を作っていないければ「残念だけど、くもの巢キャンディーはないよ」と言って首を振った。

くもは一日に数個の巢をはる。陸はそれを全部一人で食べることになれば、声を掛けてきた人に分けることもあり、翌日の分にと取り分けておくこともあった。

陸は毎日、道行く人々を眺めながらくもの巢キャンディーを食べる。

十

日差しが強く暑い日が続いた。

くもは一日に作るくもの巢の数をじわじわと減らしていき、時には丸一日、全く巢を作らない日もあるくらいだった。

陸は、くもが巢を作らない日にはガムを噛む。なつかしい味はしないけれど、なじみ深い味のするガムだった。

口をもごもごと動かしながら、陸は街の人々を眺める。

行き先を見すえ迷いなく歩く人々、ぼんやりとした表情で、まるで何かに誘い出されたかのようにふらふらとしている人たち、それから陸のことをじっと見ている男の子……。

男の子は陸と目が合うと、小走りで陸に近付く。

ねえ、あんた、いつもここにいるよね？

ソプラノの声で元気よく言う男の子。

「いつもじゃないけど、まあ、たいていはいるかな」
「何やってんの？」

「見てるだけだよ。歩いている人を見てるだけ」

「見るだけ？　なんで歩いてる人を見るの？」

「特に理由はないかな」

「退屈でしょ？」

「そうでもないよ。この人たちはみんな、一体どこに向かって歩いているんだろう？　一体このうちの何人がこの街から出たことがあるんだろう？　なんてことを考えていると、あつという間に時間が過ぎていくからね」

「それって、暇ってことだね？　だったら一緒に遊ぼうよ。」

「悪いけど、ここから動く気はないんだ。退屈してるなら友達のところへでも行っておいで」

男の子は口をすばめた。陸はガムを噛みながら、視線を街の人々に戻す。

「最近、なんか変じゃない？」

口をすばめたまま、男の子は不機嫌そうな声を出した。

「変？」

「だってさ、ノラ猫とかスズメとか、なんか見かけなくなったしさ。」

「ふうん」

「たまに、すつごく甘い匂いとかするし。」

「ふうん」

男の子は黙った。

陸もしゃべらない。ただ、道行く人々を眺め続けた。

しばらくどちらも口を開かなかったが、声変わり前の幼い声音で男の子が尋ねる。

「何食べてるの？」

「ガムだよ。食べる？」

男の子は陸からガムを受け取り、口に入れた。

「おいしい？」

まずい。ひどい味だよ、これ。

顔をしかめてすぐに吐き出してしまふ。

陸は肩をすくめた。

十

くもの巣キャンディー、今日はあるかい？

そう聞かれて陸はビンの中を確かめた。くものは巣を作っている。

「ちよつと待ってね」

陸はビンの蓋を開けようとして、ふとその手を止めた。

「ねえ、なんか甘い香りがしない？ まるで飴みたいな……」

吸い寄せられるように、陸は打ち捨てられた傘に目を向ける。ところどころ穴があき、人に使われることなく放置され、傘はボロボロになっていた。

その、ひっくり返ったボロボロな傘の内側に大きくくもの巣がはりついている。陸はそつと巣に触ってみた。

甘い香りのするくもの巣は、固く、陸が軽く触っただけでは崩れない。

「これ、くもの巣キャンディーだよ」

くもの巣キャンディーはあるかと陸にたずねた人も、つられてくもの巣に触れる。袖の下からチラリと、上品そうな金の腕時計がのぞいた。

「そういえば、飴売りの子が言ってたな。一匹、くもの巣キャンディーを作るくもが逃げてしまったって。たぶん、そいつがこのくもの巣キャンディーを作ったんだ」

ぱきりと音がした。

金の腕時計の人が力を入れすぎて、傘の内側にできていたくもの巣キャンディーを割ってしまったのだ。

十

陸のくもの巣キャンディーを作るくもは少しずつ元気をなくしている。

以前ほど活発に動かなくなったくもを、陸はガラス越しに見つめた。

「小さいくもの巣キャンディーしか作らないのは、小さなビンの中にいるからなのかな？」

ひとり言のようにも、くもに向かって語りかけているようにもとれるふうになると、陸はガラスのビンの蓋をそつと開ける。そして小さなくもの巣キャンディーを取り出すと、隣の男の子に渡してビンの蓋をしっかりと閉める。

くもの巣キャンディーを手にした男の子は残念そうに、くもを外に出さないんだ？　と言った。

「外に出したら逃げてしまうよ」

でも、大きなくもの巣キャンディーを作るかもしれないよ？

「あんまり大きいと、食べきれないだろう？」

リクは夢がないなあ。

言って、男の子はくもの巣キャンディーを口に入れる。

「おいしいかい？　ソラ」

めちやくちやうまい。ガムとは比べ物にならないよ。

満面の笑みで飛び跳ねる。

陸は空という名の男の子がはしゃぐのを見て、軽く肩をすくめた。

十

まもなく、街のあちこちで甘い香りがするようになった。

もともと少なかったけれど、陸にくもの巣キャンディーのことを問い掛けてくる人はさらに減り、通りがかりの人にくもの巣キャンディーを分けることもなくなった。

ねえ、リク。やっぱり変だよ。

空はくもの巣キャンディーを舌で転がしながら、隣でガムを噛む陸に言った。

「変？」

だってほら、歩いてる人たちさ、みんなぼんやりしてるし。

「ふうん」

なんか、さ。甘い香りに誘いだされましたって感じ？ 足元ふらふらしてるし。絶対、変。

「ふうん」

空は少し黙る。大きなため息をひとつすると、リクはきつと大物になるよ、きつとね、と言った。

「ふうん」

陸は無関心に相づちを打つと、ビンの中を確認する。

「ところでソラ、くもの巣キャンディーが出来てるけど、食べる？ 食べる。後で食べる。だから取っておいて。」

「はいはい」

陸は肩をすくめた。

十

人だかりができているのを、陸は見つける。

「これは一体、なんのさわぎ？」

人だかりに近づいてたずねると、飴で出来たくもの巣に人がひっかかっているみたいなんだと答えが返ってくる。

陸は人と人の間から覗き込もうとしたが、あまりにも人が多すぎてうまくいかない。

強く甘い香りが立ち込めていた。陸がかろうじて見ることができたのは、だいぶ大きくはられているらしいくもの巣と、それにくらめとられている、上品そうな金の腕時計のはめられた手だけだった。

+

くもの巢キャンディーを食べながら、陸は路かたで街の人々を眺める。

行きかう人々の中で陸のことを気にとめる人はいないし、珍しく空もやって来ない。

街中にはうつすらと甘い香りがただよっていた。

「……退屈だな」

どこかぼんやりとした様子で歩く人たちを眺めながら、陸は小さく呟く。くもの巢キャンディーは口の中でじわじわと溶けていき、なつかしい余韻を残しながら消えた。

何やってんの？

唐突に空の言葉を思い出す。ガムを噛むとなつかしい余韻は消えて、かわりになじみ深い味が広がる。

「……何やってるんだろっ、ね」

呟いて、軽く肩をすくめた。

+

空に手招きされ、陸は人気のない路地裏へ入っていく。

「どこまで行くのさ？」

陸が聞くと、空はいたずらっ子の笑みを浮かべて答えた。

もう、すぐそこだよ。すぐそこにさ、すっごいのがあるんだ。

甘い香りが濃く漂っている。陸はくらくらとする頭を軽く押さえながら空に続いて行き、それを見た。

空は、それをよく見ることもせず、すぐに振り返って胸を反らせる。

どーだ、驚いたか。

「……」

陸は口を半開きにしたまま、何も言えなかった。

得意げな空の背後には甘い香りのするくもの巣が、道いつぱいにはり巡らされ、通路をふさいでいる。

巨大なくもの巣キャンディーをよく見ずに、すぐこちらを振り返った空はおそらく気が付いていないが、陸は大きな大きな巣にへばりつく、空よりも一回りほど大きいくものに目を奪われていた。

巨大なくものは音も無く巣の上を移動して、空に接近する。空のすぐ後ろまで来るとピタリと止まり、ゆっくりと体を縮めた。

巨大なくものが何をするつもりなのかわかった陸は、思いつきり空を横に突き飛ばしてから、あわてて反対側に飛ぶ。

突き飛ばされた空が驚いた顔で陸を見た。陸には空がゆるりゆるりと地面に吸い寄せられていくように見える。倒れた途端に、なにするんだよと怒り顔になったけれど、二人の間に割って入ってきた巨大なくものせいで陸から空は見えなくなってしまふ。

「こつちだ」

陸は言った。しかし空の悲鳴にかき消され、誰にも届かない。巨大なくものは空に狙いを定めたようだった。

落ちている壊れた傘をつかむと、陸は背を向けている巨大なくものに全力で振り下ろす。

ばきん、と音がした。巨大なくものはあっさりと割れて、動かなくな

った。陸も空も、割れて動かなくなった巨大なくものを呆然と見つめる。

+

巣を全くはらなくなってから間もなく、陸の小さなくものは動かなくな

った。なじみ深い味のするガムを噛みながら、陸は街の人々眺める。

くもの入ったビンを軽く振るとカランコロン、ガラスと何か固いものがぶつかり合うような涼しい音がした。くもはやっぱり動かない。

それ、どうするんだよ？

空の言葉に陸は考えるそぶりを見せる。

「うーん、もうくもの巢キャンディーは作らないしなあ……。ソラ、これ、欲しいかい？」

リク、いらなからって押し付けようとしてないか？

「いや、そんなことはないよ。ソラがいらなんだったら捨てておくけど」

空は陸に手のひらを出して、言った。

いる。欲しい。ちょうだい。

陸は軽く肩をすくめると、くもの死骸入りのビンを空に手渡し、思いついたように呟いた。

「くもが巢をはるように、私はキャンディーを売るのが何それ？」

空はキョトンとして、それから吹き出す。

リクは別に、キャンディーを売ってるわけじゃないじゃん。

「このくもを譲ってくれた飴売りの女の子が、よく言ってたんだ」
へー。

ビンをくるくる回して動かないくもを夢中で観察する空は、どことなく気の抜けた声を出す。いろいろな角度からくもを観察してから、思い出したように口を開く。

でもさあ、リクって飴を売ったり巢をはったりするタイプじゃないと思うよ？

「え？」

あ、なんとなくだよ？ なんとなくなんだけどね、もしリクがくもだったとしても、巢なんかはらないでうろろと動き回るタイプなんじゃないかなーって思う。たぶんさ。

「……ふうん」

無関心そうに相づちを打つ陸に、空はニカリと笑った。

行きかう人々の足取りに迷いはない。

陸はガムを噛みながら、ゆったりと道行く人々を眺めていた。

「ガム、食べるかい？」

陸の隣でじつとしていた空は、ガムを受け取って口に入れる。

「どう？」

「やっぱりまずい。」

顔をしかめるが、今回は吐き出さずに噛み続ける。

陸は軽く肩をすくめると荷物の詰まったりリュックを背負い、行く先を見すえて歩く人々の中にまじった。

大きく手を振る空を後ろに、陸は街の出口へと向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4416m/>

くもの巣キャンディー

2010年10月28日07時47分発行